

残

念ながら、北京オリンピックのメインスタジアム「鳥の巣」はまだ実見していない。だが、数年前、同じエリアにあるアジア競技大会のために建設された北京オリンピックスポーツセンター体育館を訪れたことがある。

これは馬国馨の設計したものだが、東京オリンピックのスタジアムを手がけた丹下健三の事務所で研修しているように、やはり国家を表象する建築を求められていた。もともと、宮殿の屋根を参照したという吊り構造風のデザインはかなり荒削りであり、丹下の粗悪な模造品という感じで、建築としてはあまり高く評価できない。ここでは、ダイナミックかつモニュメンタルな表現を得意とする丹下の手法が消化不良のまま持ち込まれたように思われる。

したがって、国際コンペを通じて、今回のメインスタジアムの設計をスイスの建築家ヘルツォーク&ド・ムーロンに依頼したのは賢明だった。間違いなく、オリンピックの建築史に記憶される傑作である。鉄骨を複雑に編み込んだかのような忘れがたい造形は、現代建築

としては最速で世界遺産に認定されたシドニーのオペラハウスにも匹敵するインパクトの強さだろう。この風景を獲得しただけで、相当な宣伝効果があるはずだ。

結局、中国は自前のナショナル・アーキテクトを育てられなかったという批判もあるだろうが、パリのグランプロジエも多くの建築は外国人の手によるものだ。逆に、これだけの実験的なプロジエクトを外国人に依頼できる度胸が、現在の日本にあるかという点もとない。

ところで、ヘルツォークらは、鳥の巣は国家のためではなく、民衆のためのものであり、アンチ・モニュメントだという。しかし、開会式のイベントで、天安門から足形をかたどった火花が北上し、オリンピック公園に到達した映像があったように、それは南北の政治軸の上に正確に位置づけられている。個々の建築がどう抗おうとも、千年単位の都市計画と連動し、すでに政治的な意味をもつ空間として機能しているのだ。設計者は敷地を変えることはできない。アジア競技大会のときの施設群も、



馬国馨設計「北京オリンピックスポーツセンター体育館」。大会期間中はハンドボール競技の会場として使われたほか、「特別競技」として武術がここで披露された
写真提供：筆者

北京のスポーツ施設と都市計画

@Beijing

建築はいまいちだったが、なるほど大きな弧を描くマスタープランは都市デザインとして成立している。こうした大きなスケールの操作は、やはり中国の得意とする空間感覚であり、東京では絶対に真似できないだろう。☺

をちこち散歩

五十嵐太郎

いがらしたろう
建築史家
東北大学准教授